

女性医師支援フォーラム

「医師のワークライフバランス －次世代が実践できるモデルを考える－」

日 時 平成24年12月2日（日）午後1時30分から午後3時30分

場 所 新潟県医師会館 3階 大講堂

パネラー 根 本 忠（片貝医院院長）

根 本 聡 子（片貝医院副院長）

森 田 健 一（国立循環器病研究センター医長）

森 田 由 香（新潟大学医歯学総合病院耳鼻咽喉科助教）

吉 田 敦
（獨協医科大学病院感染制御センター副センター長）

吉 田 穂 波
（国立保健医療科学院生涯健康研究部母子保健担当主任研究官）

司 会 小野沢 裕 子（フリーアナウンサー）



平成24年12月2日（日）、女性医師支援フォーラムを県医師会館で開催した。本フォーラムは「医師のワークライフバランス―次世代が実践できるモデルを考える―」と題して、結婚・出産・育児の過程において、女性医師がそのライフステージに応じた多様な働き方を柔軟に選択し、働き続けてもらうことを期待して、パネルディスカッション形式により開催した。とても有用なフォーラムであったため、出席した方だけでなく、より多くの方々に知ってもらうことを目的とし、本会報に掲載する。

（県医理事 庭山）

司会（小野沢） 皆さんこんにちは。司会を担当させていただきます小野沢裕子と申します。今日は医師のワークライフバランス―次世代が実践できるモデルを考える―ということで、次世代が実践できる方法と実践しやすい環境づくり、これをどのように整えていくと女性医師、そして男性医師が働きやすくなるのか、次世代が働きやすくなるということ、今日のフォーラムの内容は全ての皆さんに関わってくるのではないかという気がしております。

それでは早速、3組のご夫婦、2人とも医師であるパネリストの先生方に結婚歴、家族構成等を含めて自己紹介をしていただきたいと思います。

根本聡子 皆様こんにちは。小千谷市の片貝町で片貝医院を夫と2人で開業しております根本聡子と申します。結婚は1995年の11月ですので17年経っています。家族構成は夫婦2人に子供が高校1年生と中学2年生と小学3年生の5人家族です。子供達は比較的手も離れつつあるのですが、塾、受験などそういった事で忙しさの質が変わってきております。

私が第1子を出産した時は慈恵医大の分院勤務でした。当時は有給で働ける助手の人数が限られておりまして、無給で働いている人がたくさんおられるのに育児休暇では申し訳がないので産後の休暇を終えると同時に病院を辞めました。翌年に夫が大学人事で小千谷市に派遣されたのを機会に、こちらで第2子、第3子を出産いたしました。本当はのんびりと育児に専念したかったのですが、当時片貝町にあった医院が高齢化で跡継ぎがおらず、無医村になるのではと町の人たちが思案して私に開業の打診をいただいたため、覚悟を決め開業に踏み切ったのでした。

根本忠 根本聡子の夫の忠と申します。私は慈恵会医科大学を卒業して骨髄移植という高度先進医療に携わっておりました。実は平成3年に1年

間、小千谷市の厚生連魚沼病院に派遣をされまして、この時は独身だったのですが、この時に片貝まつりの正四尺玉という花火を見て度肝を抜かれました。また、四季の移り変わりの非常に美しいところなど、「もし自分が結婚して子供ができたらかういところで子育てをしたい」という思いがずっとありまして、当時私は骨髄移植の運営委員長という立場だったのですが、そういった立場を辞して片貝町に参りました。

妻が先に開業医をしていたのですが、やはり子育てで大変だということで、私も魚沼病院の内科医長を辞して医院に入りました。今は、子育てに関しては勉強は妻のほう得意なので私は主に子供の体育のほうを担当しております。仕事は完全分業でやっております。本日はよろしくお願いいたします。

森田由香 皆様こんにちは。新潟大学の耳鼻咽喉科の森田由香と申します。私たちは大学の同級生として出会い、結婚し、12年目になります。半分ぐらいは単身赴任という形で生活しています。子供は今現在8歳と4歳と2歳の全員女の子です。第1子を妊娠したのが大学院に行こうと思った時でしたので、これから勉強するという時に、「すみません、妊娠しました」と。やっぱりその時は「すみません」と言ってしまった覚えがあります。第2子、第3子を出産するにつれ、すみませんという気持ちは正直、徐々に薄れてきました。というのも、当科の教授は非常に理解のある方です。「お互い良い環境を作りながら仕事をしていこう」と言っていただき、実際それが実践できているので今までやってきていると思っています。

森田健一 夫の森田健一と申します。単身赴任を去年の9月からしております。ちょうど大阪へ単身赴任する時、三女が1歳でしたが、これを機に関西の生活を家族でするのもいいのではないかと思います。しかし、長女が転校を拒否したた

め単身赴任が続いています。

本日はこういうところが聞きたいとか、こういうところは正直どうなのというところを話させていただけたらと思います。どうぞよろしく願いいたします。

吉田穂波 皆様はじめまして。吉田穂波と申します。私は夫のドイツ留学について行き、フランクフルトで第1子を授かりました。私の日本で培った経験から、妊娠してしまいますと職場の方に「すみません」と頭を下げるものなのかしらとドイツでも思っておりましたが、妊娠を報告したところ、上司からも同僚からも「君も一人前だね、人間としてグレードアップするよ、よかったよかった」と手放しで喜ばれる感じでした。私がここまで子供を4人産めたのもそのスタートがよかったからと思っております。

私どもは結婚して8年目です。子供が8歳、6歳、4歳、2歳と女の子ばかりです。私は夫を非常に尊敬しておりますし、この人だから家庭を築くことができたとします。けれども、私どもがスーパーラッキーだったからではなく、本当に小さな積み重ねでここまでこれました。しゃかりきになって頑張らなくても、女性だけに負担がかかる、あるいは男性だけに負担がかかるということがなく、仕事も家庭も楽しく続けていけるようなヒントを見つけていただけたらと思っております。

吉田敦 吉田穂波の夫の敦と申します。妻とは同僚の紹介で出会いました。妻と出会う前に留学の話があり、あと半年でドイツに1人で行くのか、それとも奥さんを見つけ一緒に行くのかということもありまして、結婚をだいぶ積極的に考えたことがあります。しかしながら、私が臨床医として海外で働いても、妻がそこでどうやって働けばいいのかということがありました。単にドイツについてくるだけじゃ彼女に可愛いそうだという思いがあり、妻は自分のスタンスを決め、やりがいも見つけてくれて良かったと思っています。

育児に関しましては、本当に特別なことをしているわけではありませんが、補い合っているところもあるかなというふうに思っています。

妊娠＝仕事を休む？

司会（小野沢） ありがとうございます。自

己紹介を聞かせていただき、わかったことは、結婚すること自体は仕事を調整しよう、ましてや、やめようと思う理由には為らなかったようですね。では、妊娠がわかった時はどうでしたか？ちょっと仕事を休もうと根本先生はお考えになりましたか。

根本聡子 研修先の病院でお世話になったのが縁で慈恵医大の先生から大学勤務に勧誘していただいた際、私はチャンスがあったら結婚もしたいし出産もしたい、子供も育てたい、それでもいいでしょうかと聞きました。そしたらどんな形でも、どんな働き方でもゼロにならないでいてくれればそれでいいというお答えをいただいたのでほとんど心配はしてなかったですね。森田先生は「すみません」と言ってしまったと言っておりますが、それはムードがそんな感じだったのですか。

森田由香 4月から院生ということで、当然ここから2年間しっかりするぞと思っていた矢先に妊娠がわかったため、研究室のムードは正直言ってわかりませんでした。しかし、研究室の教授もすごく理解がある方でしたので、それこそ吉田先生の話じゃないですけど、「子供を産んで一人前だから」と言われました。ですが、実験は実験でやらなければいけませんし、大事な仕事だからと思う気持ちから「すみません」と言ったのですが、すぐそんなことはないということを感じられて安心した覚えがあります。

司会（小野沢） その時にパートナーである健一先生は？

森田健一 結婚して3年目に子供を授かったので、私としては嬉しい気持ちでした。あと大学院ということで、臨床業務に勤めていて先生方にご迷惑をかけるより良いのではと考えていました。

司会（小野沢） 大阪行きが決まった時、奥様からは？

森田健一 正直なところ妻からは断ってほしいと言われました。子供が3歳になってある程度のことのできるまで3人の子供を1人で見るのは正直苦しいと言われました。親に助けてもらうことも多いと思いますが、ただ両親も年を取りますので、1人を見るのと3人の面倒を見るのでは手間が違いますし、いろいろとそこところは男の甘さというか、そういうのがあったのだと思います。

司会（小野沢） 吉田先生はお子さんが4姉妹ということですが、どんな生活をしていらっしゃるのですか。

吉田穂波 バタバタです。特に月曜日の朝は本当に大変で、子供達は何となくまだ甘えたいのかぐずるんです。子供達を送り届けるとその瞬間からすごく解放された気持ちになります。仕事に向かえるのがうれしいという感じですね。私の場合は子供と離れているとますます子供がかわいくなるというタイプですので、仕事で疲れていても、お迎えに行ったら子供達から「お母さん！お母さん！」と言われるとすごく癒されます。仕事と家庭をうまく行ったりきたりするほうが私にとってはストレスの少ない生活になっている気がします。

司会（小野沢） 現在の生活がもっとこうなっていっていいなというところはありますか。

吉田穂波 今の課題は長女、次女にもっとお手伝いをしてもらえるように家事のことを仕込むとか、自分でできるようにしてもらおうというのがあります。人間力とか生きる力を植えつけて18歳になって独り立ちできるようにという、それが今の目標です。ですが、忙しいとつい私がやってしまって、靴下も自分達で履けるのですが、その数分が惜しくて履かせてしまう時があります。

バランスの話に戻りますが、私と夫のバランスというのも、フィフティフィフティじゃなければいけないということはないのかなと思っていて、アウトソーシングするとか。

周りの人の力を借りる

司会（小野沢） そのアウトソーシングの部分をお話していただいてもいいですか。

吉田穂波 仕事をしながら自分自身の人生も楽しみ、家事も育児も1人で全部するということはできないと思います。私の場合は週に2回、シルバー人材センターの方に来てもらって料理や洗濯、掃除などをしていただいたり、近くの大学生の方に週に1回保育園のお迎えをお願いして、その日だけは私もちょっと遅く帰れる。そのような感じで周りの人の力を借りるというのが必要なかなと思っております。

司会（小野沢） 周りの人の力を借りるという時に最初からすんなりとできましたか。

吉田穂波 1人目は私も頭でっかちになったし肩に力が入っていましたので、一生懸命、頑張りすぎました。その時に私の母がヘルパーさんやシッターさんを頼んだらといって後押しをしてくれました。最初は人様に頼むのは恥ずかしいと思っていたのですが、「頼んでみるとこんなに楽なんだ」と思いました。それまでは全部自分でやろうとしてかなり大変でした。

司会（小野沢） その時にご主人はいかがでしたか。

吉田敦 アウトソーシングするというのは、私自身もそのほうがいいかなと思っているところがありました。妻自身もだいたい精神的に楽になるかなと。

司会（小野沢） 森田先生のところもシッターをお願いしていらっしゃるようですね。

森田由香 どうしても帰りが遅くなる時がありますので。保育園のお迎えも母親が迎えに来てくれるというのが子供はうれしいようですので、毎日ではなく、曜日を限定して迎えに行ってもらっています。本当にプロの方ですので、家に帰ると楽しくキャアキャア遊んでいて、私だったら同じように遊んであげられないかなと思う時もあり、最初は抵抗があったのですが、もう今は後輩たちにぜひ使ってくださいと勧めているぐらいです。

司会（小野沢） 根本家ではいかがですか。

根本忠 私の母は専業主婦でしたので学校から帰って母親がいなかったというのは2回ぐらいしか覚えがありませんでした。ですので、家政婦を雇うという時に内心反対の気持ちは強かったですね。ただ実際、家政婦さんに入ってもらったと、別の大人とふれあうチャンスがあるということが子供にとって非常にメリットがあることだとわかりました。

また、家庭の中で非常に重要なことは、夫が男として自立している必要があると感じています。

子育てのメリット

司会（小野沢） 医師にとって子供を育てるメリットをいくつかご紹介いただきたいのですが。

根本聡子 まず社会がこうなってほしい、未来がこうなってほしいとか、そういうことを真剣に考えるようになりました。あともう一つ、うちの

医院は老若男女全員診ているという形の診療所です。なので、子供を育てている方の不安とか悩みとか、例えば夜発熱したとか吐いたとか痙攣したとか、そういった時に実際に見ている人たちがどういう言葉を期待して、何を聞きたがっているのかなど、そういった視点にずっと入れるようになりました。

森田健一 社会環境で生きていく中で人間関係は色々ありますが、思うようにならないことが多いということを子供から教えられました。子供から教えられて、仕方がないことは仕方がないこと、と受け入れられるようになりました。

吉田穂波 私は元々産婦人科医ですのでもうアドバンテージだらけです。独身で子供がいない時は患者さんに「あなたは産んでないでしょう」と言われたら終わりでしたが、子供を産んだことで産婦人科医としても信頼度が高まりましたし、子どもは地域のパスポートといいますけれども、地域のいろんな方々との関わりができたことで、私の幅を広げてくれたと思います。

ここが変われば仕事も充実するのでは？

司会（小野沢） ありがとうございます。さて、ここでパネリストの皆さんからここが変われば若い人たちが働きやすい、医師の仕事をもっと充実させることができるというところをぜひ教えてください。

森田健一 一番困ることというのは病気の時だと思います。妻がもし仕事でいけないとなった時に、ヘルパーさんが病院へ連れていき、わが子の看病をしてくれている姿を想像します。夫としては少し切ない思いがあります。きっと皆さんも経験されたことがあると思うのですが、男性の考え方というのはどうしても病気の時は母親が対応してほしいというのが本音だと思います。その辺ぜひ先生方のご意見をいただけたらと思いますがいかがでしょうか。

吉田穂波 子どもが病気になった時の対応というのは本当に大事なところだなと思っています。私がアメリカ留学中にいた大学病院や関連病院には病児保育というのはありませんでした。病児から回復期にかけて預けられるような保育園はあったのですが、本当に熱を出していて医療処置、服薬が必要という時は病児保育というのではなく、

親が簡単に休めるようなシステムをとっていました。

また、アメリカは主治医制ではなく、チーム制ですので誰かが欠けたとしてもサポートできるようになっています。なので、病児保育を整備するためのお金に見合うぐらいの利用者がいないというような状況がもしあるようでしたら、チーム制を導入してはどうかと今お話を聞きながら思っていました。

司会（小野沢） 根本先生はもっとここが変われば働きやすいのにといい点でどこかありますか。

根本聡子 うちは自宅と医院が併設してあるので、ちょっと時間が空けば子供が寝ている部屋に見にいける。ですから安心感もありますよね。自分が心ここにあらずという状態にならずにすみす。看護師さんたちにも家族に何かあった時にはすぐその場で申告して帰る様に促しています。そういう職場が一般的になればいいのだろうとは思いますが、どうなのでしょう。急に休めない時に親代わりの人を探す苦労も大変なことで、それを個人の努力に依存させないよう、社会システム上でもう一工夫できそうな気がしますし、最近はかなりできてきているのではないかと思っています。

次世代へのメッセージ

司会（小野沢） それでは時間がそろそろ迫ってまいりましたので、これから結婚、出産、育児を迎える皆さんへのメッセージ、または病院内、こんなふうにもうちょっと変わっていったらいいのというようなご意見を交えて、お1人ずつお願いします。

根本聡子 やっぱり女性のライフプランといいますか、結婚、出産、育児、どうしても自分の考えたとおりに勤務できないようなことも出てくるわけなのですが、そういった時に理解を示し、言葉をかけていただいた方にたくさん出会えたのが私は非常にラッキーだったなと思います。「これで人間として一人前になれたんだよ」という言葉は非常に大きいことだと思います。

根本忠 妊娠、出産というのは女性にしかできないことですが、育児に関しては父親でも関与できることなんですね。ですので、職場の環境を整えていくということの他に、先程申し上げたとお

り、家庭の中で男が自立していくといったことが非常に女性医師の仕事を継続させるために重要なことだと感じています。

森田由香 仕事の制度とかパートなどいろいろ整備していただいているのは大変ありがたいことですが、それを結局使えないと全く意味がないと思っています。それを遠慮して使うような雰囲気だとやはり使う側もその制度を使いたいと言いにくくなってしまいます。どこの職場でも女性だけが子育てに関わるというわけではなく、子育ては夫婦でやるものですし、子は宝と言いますように、この少子化、大事な子供達です。お父さん方も、つまり男性医師も「今日保育参観があるからちょっと行ってくるわ」と言えるような雰囲気があるといいなと思います。

森田健一 一番大事なことは理解しあうということだと思います。女性の方が子育てしながら仕事をするのは大変ですが、夫である男性医師は基本的に理解できないんですよね。その状況の中で夫である男性医師が妻を一番理解してあげないと女性医師である妻が一番つらい思いをしてしまうと反省しているところです。私が上司から、「出産には絶対行け」、「緊急が来てもお前じゃなくていいから出産に行け」、「授業参観があれば行け」と言っていたんですけど。そうしますと妻に「もし行けないなら俺行くから」と言いやすいんです。理解してくれる上司に恵まれれば妻にもやさしい言葉をかけられるので、そういう環境というのが今新潟県内ではできてきていると思っています。それを僕らが今度は後輩に「新婚旅行に行こうか行くまいか迷っているんです」と言われた時に、「思い切って休んでヨーロッパにでも行ってこい」と言ってあげられる僕らがいることも大事であると感じています。

吉田穂波 私もここで皆さんのお話を聞くだけで非常に励まされましたので、ぜひ「新潟モデル」というものを作っていただきたいと思います。と言いますのは、医師会は地方行政にも非常に大きな力を持っていますので、医師会と地方行政とで何かタイアップをして、例えば子育てドクター系のファミリーサポーターの輪を作っていただいたり、人材不足の中で共働きカップルを支えるような「新潟モデル」といったしくみができればと思

います。働いている以外に子育てをしているということが人としてのダブルマスター(二重の価値)になるように、本当に胸を張って誇らしく思えるように、私も支える側に回っていきたいと思います。

吉田敦 このフォーラムのタイトルは女性医師支援ということですが、今のご意見をお伺いしていると女性医師の方が働きやすく、子育てしやすくというところにはどうしても男性が関わってきます。ですので、男性も女性も支援しようという姿勢が大事なかなと感じています。

あとちょっとした提言ですけれども、男性が育休をとるためには同僚や医局、病院といった中での理解が重要なのはもちろんですけれども、病院の方針や経営というところに関わってくることになると思います。それから、病院は都道府県から医療監視を受けたりしますので、その時に子育て中の医師が働きやすい労働環境になっていますかというようなことも評価項目に入れてほしいですし、さらには厚生労働省と言っていますので、労働の部分でもそういったところに関わってきてほしいですね。

司会(小野沢) 今先生方のお話を伺っていると、まずお互い自立することが大切、そして制度がきちんと作られて、その制度を遠慮することなく利用できる、そのためには理解ある上司の存在が大切だとわかりました。先程「新潟モデル」というものを作ってはいかがですかというお話がありましたが、「新潟モデル」ができて、女性医師・男性医師問わず働きやすくなっていった時には、このシステムが新潟県内の様々な場所で活用され、それが広がっていくと、働きやすい労働環境が全体に整っていくのではないのでしょうか。そのためにぜひ医師会の皆様に先陣を切って「新潟モデル」を作っていただき、誰もが働きやすい環境、それを実践するために遠慮しなくても利用できるムードをみんなで作っていく事ができたらと思います。

今日ご参加いただきました皆様、こういったことはいかに多くの人を巻き込むかというのが大切です。今日ここで3組の先生方がお話されたことを1人でも多くの方に伝えて進めていただければと思います。先生方どうもありがとうございます。パネリストの根本先生、森田先生、吉田先生ご夫妻にどうぞ拍手をお送りください。